

ミヤコタナゴ保護増殖受託事業

戸井田 伸一・岡 彬

ミヤコタナゴは日本産淡水魚の中で絶滅の恐れのある種として、昭和49年国の天然記念物に指定されているが、本県では当場が唯一の生息地（飼育地）となっている。当場では昭和54年度から飼育池を利用した繁殖試験を実施するなど、種の保存、増殖に努めてきたが、昭和60年度は横浜市教育委員会の依頼にもとずき保護増殖受託事業を実施したので、その結果を報告する。

なお、ふ化仔魚飼育水の至適塩分濃度試験及び産卵貝選択試験については本報に別載した。

飼育現在量

昭和61年3月31日の飼育現在量、親魚239尾、当歳魚1,137尾計1,376尾である。

試験結果

1. 飼育池における繁殖試験

屋外飼育池（2×2×0.4m）2面にミヤコタナゴの親魚をNa6池には雌雄各20尾、Na8池雌雄各15尾を放ち、産卵母貝としてNa6池に87個、Na8池に65個のマツカサガイをいれて量産試験を行った。各池には湧水約1ℓ/分注水した。餌料としてアユ用配合飼料及びタマジシコを適宜与えた。

親魚放養後30日目の6月15日から10月15日の間にNa6池から391尾、Na8池から276尾、計667尾の浮上仔魚が得られた（第1表）。

2. 産卵用母貝選択試験

(1) 屋外飼育池における産卵試験

ミヤコタナゴの産卵母貝としてマツカサガイが知られている。しかし、この貝は近年入手困難になっているのでマツカサガイに代わる淡水産二枚貝について調べた。

前述と同じ規模の屋外飼育池でドブガイ、イシガイ、オトコタテボシを用いて産卵を調べた。その結

果ドブガイ、イシガイには産卵していることが確認されたが、浮上仔魚は得られなかった。

(2) ガラス水槽における産卵試験

ミヤコタナゴが産卵母貝として好む貝を組み合わせ入れて、その選択性を調べたところ、マツカサガイ>オトコタテボシ、ドブガイ>イシガイの順であった。

3. ヒルの寄生状況と駆除試験

ガラス水槽を用いた産卵試験の結果から、ミヤコタナゴはヒルの寄生している貝には産卵していなかった。

ヒルはマツカサガイ、オトコタテボシ、ドブガイ、イシガイのいずれにも寄生していた。

ヒルを駆除する目的でヒルを貝から取り出し、ヒルの致死塩分濃度を調べたところ、1.5%で15分、2.0%で10分であった。しかし、この濃度では二枚貝が先に衰弱するので、ヒルの寄生した貝を塩水に浸しヒルの駆除をするのは困難であると考えられる。

4. 人工採苗技術開発試験

(1) 量産試験

4月22日から7月2日までの間、雌親魚89尾を用いて人工採苗を行った。人工採苗の方法は岡らに準じたもので、乾導法で採卵した卵を0.01%の塩水にいれ、22℃に調整した低温恒温槽で管理する方法である。採卵数は4,116粒で、その85.3%にあたる3,509尾がふ化した。

ふ化からの浮上率は60.7%で2,121尾の浮上仔魚が得られた。

(2) ふ化仔魚飼育水の至適塩分濃度

ふ化仔魚飼育水の適塩分濃度は0.1～0.0005%の範囲であった。

文 献

- 1) 岡彬他（1980）：ミヤコタナゴの人工採苗に関する研究—1、水産増殖、32(2)、73-76。

第1表 繁殖試験結果

飼育池	親 魚 数		卵 数	浮上尾数	浮 上 時 期
	雌	雄			
6	20	20	87 (100)	391	6月15日～8月8日、 9月18日～10月14日
8	15	15	65	276	6月24日～10月15日
計	35	35	152	667	

Na6の池から13個サンプルとして取り出している。